地域に根づく農業

大野水耕生産組合 代表理事　大和田正幸
（JAいわき市経営管理委員会委員）

私達の住むいわき市は、東北の南端にあり太平洋に面した地域で、農家の平均耕作面積は70a以下。地域内に働く所が多くあるため、専業農家がだんだん少なくなり兼業農家の多い地区です。気候的には夏は涼しく秋の台風災害もわりと少なく、冬は温暖で特に12月より３月までの日射量には恵まれた地域であります。

農地面積は人口36万人の割には少なく、耕地利用型農業で農業経営をしていくには、数多い法人ではむずかしいと思われます。その様な地域で安定した農業経営をしていくのには、この恵まれた特性を活用した農業、施設栽培での農業経営が良いと思いました。地域内に国の事業で農業構造改善事業の助成事業がありそれを利用させて頂き、平成２年度に農事組合法人を設立しました。作物は冬場の日射量が大変多い（夏は涼しく）という条件と当時生産量と価格が安定していたトマトに決めてスタートしました。

栽培方法はロックウールを使用した養液栽培のため、根の状況が良く長段取りの年１作型です。８月上旬定植し、９月中旬より収穫を始め、次年の７月下旬まで、収穫トマトの段数で30段程度、長期収穫の出来る栽培を行い収量を出来るだけ伸ばす事を目標に作ってきました。

私は、そもそも始める前は農業をしていたわけではありませんでした。JAに20年勤めていました。そんな中あるチャンスがあり農業を始めました。農業をやるからには、前から考えていた目標なのですが３点の目標を持ってスタートしました。１つは決まった休みの取れる農業、２つ目は各個人のポジションをしっかり決め責任を持った中で作業をしてもらう、３つ目は、農業をやるからには大きな目標として８ケタの収入を目ざしてがんばる。それに向かって反当たり１千万円以上の売上を上げていく事です。私達にとっては、大変大きな目標です。その目標に向かって４～５年後、JAとの話し合いのもと、資金のメドもどうにかなると思い、行政等にもお願いし、JAの協力もあって、施設の増設に着手、平成６年度末に２号棟温室約70aの施設が出来上がりました。

その後、10年間トマトだけの栽培をしてきたわけですが、その中で規格外のトマトや２級品のトマトが少しずつ直売で売れる様になり、徐々に売上が伸びてきました。私達の地区は、純然たる農村地区ですので、消費者の人達がめったに来ません。どうしたら来てもらい、見てもらって、買ってもらえるか考えて、トマトではなく、イチゴだったら来てもらえるのではと思い、イチゴの高設栽培の施設約30aを平成15年に作り、来て食べてもらう観光イチゴ園を設立、どうにかトマトもイチゴも直売が伸び経営を助けております。特に次世代の子供達に来てもらえるのが大変うれしいです。

３年後、イチゴが足りなくなってしまい約20aのイチゴ施設を増設、今も楽しんでもらっております。

平成20年頃になると、当いわき地域にも私達と同じ方式の栽培施設も多くなり、トマトを作っている法人も６法人と温室面積も16haに達し、特に冬場のトマトの大きな産地になってきた様に思われます。その中のトマトを生産している４法人と話し合い、協力しながら共同販売をするためのサンシャイントマト出荷協議会を10年前に設立し、同じブランドでの市場出荷を致しております。今後も周りの人達と力を合わせながら産地の育成に、また、技術の向上にと努力し、いわきの地域に合った農業のあり方、農業の活性化に努めていきたいと思います。

（おおわだ　まさゆき）

農林中金総合研究所
http://www.nochuri.co.jp/